

# 国分寺

## 分水嶺的関頭に立つ諸問題

昭和五〇年の日本経済はインフレと不況に挟撃されながら物価、賃金、国際収支等の動向に慎重な配慮を加えつつ、マイナス成長から低成長へ這い上がりとする苦難の年であるが、同時に世界の先進国全体に襲いかかっているコスト・プッシュ・インフレを何んとかして克服し、スタグフレーションから抜け出す道を捜し求めなければならない試練の年でもある。

しかも、内外の政治的環境は不安の深化とさびしさの渦巻きであると形容できる。田中政権の崩壊が金脈問題を土台としているだけに、それが政局收拾の過程に特殊な複雑性をもつ「しこり」とな

って政治経済界の混迷を加重するは明かだ。これからの重要経済難題を解決するためには、国民のコンセンサスを大巾に獲得することが不可欠の条件となっていることを考えると、金脈問題から政治的「しこり」は軽視できない政治混迷・経済不安への圧力となる。

海外情勢もただならぬ雲行きにあると言えらる。中東情勢はキッシンジャー米國務長官の不死鳥的健闘にもかかわらず、累卵の危きにあり、もし万一にも第五次中東戦争勃発せんか、周恩来さんの言葉ではないが「天下大乱」への口火にならないと誰が保証できようか。

また、石油と食糧を武器とする所謂「資源外交」が、これからのような展開を示すのか。それは石油価格の引下げ問題やオイル・ダラーの環流問題と関連して、まことに楽観・悲観両面に高い密度を内包する世界的な重大関心課題と言えらる。僅か一年間に四倍にも



# 昭和五〇年の 内外経済展望

——スタグフレーション過程の苦闘——

早稲田大学国分寺校友会・顧問 村山 公三

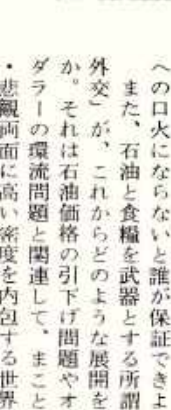
引き上げられた石油価格を、このままにして置けば、僅か数ヶ国の産油国に、世界の収と、富と、権力が大巾に集中され、それが結局世界経済を破綻に導くことは必至である。それ故に、このまま静観してはならない、という焦燥感がキッシンジャー米國務長官の有名なシカゴ演説に露骨にあふれていた。それ故にこの焦燥感のもり上がり、一九七五年の世界政治経済を危機的にゆさぶる大きな軸となる可能性も濃い。

以上のように、昭和五〇年（一九七五年）は、世界史的にみて、記録に残る一つの重要な分水嶺的問題に立った年といえる。そして上述したような世界の今後の運命にかかわる重大問題の息吹きに対して、世界の政治経済は敏感な反応を示さざるを得ないであろう。その反応には長期的なものもあれば短期的なものもあらう。が、短期的にみても、来る新年に訪れるであろうその波頭は荒く、且つ大きいものであることが予想される。

さらに、経済混乱の上に、極右、極左のテロ横行によって文字通り破綻しつつあるイタリアの政治経済が、どのような展開を見せるか、先進資本主義体制の一角が崩壊するかどうかという体制上の問題として、その影響するところは極めて大きい。ためにこのイタリアの破産を何んとかして救わんとして西独は二〇億ドルものクレジットを無理をして供与したくらいである。イタリアの破産は、経済的には世界恐慌の引き金になると同時に、政治的には民主自由世界への深刻な打撃となるので、今や特別な関心を払わねばならなくなっている。

一シオンから、何とかして脱却する血路をさがし出すということである。スタグフレーションとは言いまでもなく、スタグネーション（景気停滞）とインフレーション（物価上昇）の合成語で、その両者が同時に進行していることを意味している。従来の経済常識によれば経済活動が停滞して不景気になれば、一般的に需要が減り、従って物価も下落するのである。この常識を完全に破っている経済現象が出現したのだから、各国がその対策に苦慮するのは当然である。

また、英国のウィルソン労働党内閣が打ち出している「社会契約」という政策が、果たしてどのような成果をあげるのか、勿論、それは長期的な課題ではあるが、英国の経済的難局は、その成果のメドを一日も早くつかみた



が、米英においては、それは数年前から頭角を露わしていた。なお、このスタグフレーションという言葉は、一九七〇年六月の総選挙で政権に返り咲いた英国保守党内閣の蔵相となった故マクロード氏が、当時の英国経済の状況を説明するために議会で使ったのが最初なのであって、当時英国の経済成長率は実質で一%にすぎなかったのに、消費者物価は五%以上の上昇率を示していたのである。

しかし、それに先立って米国では一九六二年以降、ケネディ、ジョンソンの両政権下で賃金のガイドポスト政策がとられ、さらにニクソン政権下では非常にきびしい賃金および物価の凍結政策が採用された。これは「所得政策」と呼ばれているが、第二次大戦後組織的に展開された経済成長政策の下で、クリービング・インフレが発展し、やがてコスト・プッシュ・インフレに転化した段階に対応した政策といえる。

ところで、このコスト・プッシュ・インフレと密接に結びついているのがスタグフレーションで、スタグフレーションの背景には、賃金の大幅引き上げ（労働生産性の上昇率を無視した賃金の引き上げ）や寡占価格の形成による価格の下方硬直性の存在が指摘されている。そして、コストインフレ対策として考えられた「所得政策」の定義についてはO.E.C.D.（経済協力開発機構）は「政府当局が物価の安定を目的として賃金、利潤、地代などの所得上昇についてガイド指標を設け、人々がこれに従うよう指導する政策」と述べている。

しかし、所得政策に対しては労組は、賃金抑制の道具にのみ使われるとして、なかなか協力せず、結局は失敗して今日に至っている。というのが実情である。

ために、「所得政策」アレルギーが波及しコスト・インフレは一段とつるばかり、その対策に苦慮しつつある間に、突如としてオイル・ショックに襲われ、ここに世界の先進国は深刻な物不足不安と狂乱物価に見舞われ

遂に思い切った総需要抑制策を打ち出さざるを得なくなつたわけである。すなわち各国は文字通り的高金利政策を展開し、各国の中央銀行の公定歩合は歴史上未曾有の高水準に引き上げられた。同時に財政面からも緊縮政策を展開した。その結果、スタグフレーション現象は各国において一段と鋭角的となった。そしてこの鋭角度を高めたメスで出血多量の瀕死状態に追いつめられているのがイタリアなのである。

**軽視できぬ不況の深化**

ところで、不況と物価高というスタグフレーションの内包する二律背反の両角への対策として、先づインフレを優先的に抑制しなければならなかったのは、スタグフレーションの原点が物価高にある以上当然である。しかも石油ショックによって所謂狂乱物価が荒れ狂ったのだから、この火を消すことが最大、最強の政策要請となった。加えて石油価格の急上昇による産油国への支払も急増し、国際収支は大幅に悪化したのだから、各国ともその引き締め政策への腰の入れ方も真剣にならざるを得ないのである。その結果、経済活動は目を追って縮小に向かい、七、八月頃から所謂オーバー・キル（景気の冷し過ぎ）論が高まり、やがて不況警戒論に発展し、今後は「物価より景気」、すなわちインフレ対策より不況対策を優先しなければならぬというムードが高まってきた。

不況は一九二九年―三三年に至る大恐慌を想起させざる程の株価の大暴落、倒産の増加、さらに失業の増大傾向を伴って深刻化した。米国の実質GNPは本年一―三月に前期比年率七・〇%のマイナスとなり、つづいて四―六月も同一・六%のマイナス、さらに七―九月も同一・九%のマイナスと三期連続のマイナス成長を記録した。西ドイツも本年一―六月の実質GNPは前年同比一・三%

の低成長、八月の鉱工業生産は前年同月比マイナス三・八%となった。特に警戒は米国における失業増加の傾向である。既に失業率は危機ラインと言われている六%に達しているがサイモン財務長官は一月二十五日の記者会見で来年春までに七%の台に乗るだろうと語っている。西欧に眼を向ければ、E.C.（欧州共同体）委員会が明らかにしたところによると、E.C.域内の失業者数は九月現在で三〇〇万人に達しているが、来年（一九七五年）四月には四〇〇万人を突破するだろうとのことである。また最近開かれたO.E.C.D.（経済協力開発機構）の経済政策委員会では七五年の主要各国の経済成長率は実質二%という低成長にとどまるとの見通しに立ち、もし各国が依然として引き締め政策を続けるならば、失業と不況の規模はさらに一段と世界的に拡大深化せざるを得なくなると懸念している。

**引き締め緩和の米・西独**

大衆参加民主主義下の政府は、失業の増大や不況の深化に対しては、インフレ物価高に対する以上に敏感に対応せねばならない立場に立たされている。だから、物価上昇率や国際収支動向という二つのモロサシをしつかりと握りしめながらも、不況打開というか脱不況のために、たとえそれが微調整的規模のものであろうと、引き締め政策の手直しに着手する機会を見逃すことは許されない。まさに文字通り鋭敏にして活発な経済政策の対応が要請されている時代なのである。

それ故に、米国と西独が先づ景気刺激策に口火を切ったことは、一応敏感な対応として評価できる。すなわちフォード新政権は一〇月に発表した「新経済計画」の中に投資税控除率の引き上げや住宅金融の改善などの景気刺激策を採用した。また連銀が金利低下を促すためにフェデラル・ファンド・レートの介入点を徐々に下げている。ためにプライムレ

ート（一流企業に対する最優遇貸出金利）は年内に九%台に下がるようになってきた。引き締め緩和への努力と配慮は今後一段と強化されるであろう。

西ドイツでは九月の建設業界向け特別財政支出九億マルクを決定、一〇月には公定歩合を〇・五%引き下げて景気刺激策に転換した。続いて十一月二十六日の経済関係閣僚協議会で投資奨励法案の提出を決定した。この法案は六五億マルクの基金を設け、生産財関係設備投資に対し、投資額の七・五%に見合う奨励金を当該企業に与えるというもので、一年前の投資抑制策からの一八〇度の転換である。西独の消費者物価上昇率は、他の先進国のそれが一〇数%であるのに対して七%台と一ヶ字にとどまっているので、失業増大を防止するため相当思い切った景気刺激策を展開しようとしているようだ。西独の失業率は七八万人に達し、戦後最大の不況といわれた一九六七年当時の失業率二・八%をしのぐ三・四%に達しており、五大経済研究所の共同経済報告は「今冬の失業者数は一〇〇万人に達するだろう」と予測している。西独が相当積極的な景気拡大政策に転じようとしていることは当然といえる。

**昭和五〇年の日本経済**

ところで、わが日本の昭和五〇年における経済動向は如何。

既に二年間にわたって総需要抑制策が組織的に展開されてきたため、四九年度の実質経済成長率はマイナス一・六%と戦後初めてのマイナス成長となることにはほぼ確実に予想されている。不況相が深化拡大しつつあることは当然である。産業界に倒産、人員整理は相次ぎ、有効求人倍率も一〇月には遂に〇・九六一を割った。他方、販売物価は次第にその上昇率を鈍化してきたし、国際収支も好



# ソビエト連邦を視察して 中藤 俊一

会長 中藤 俊一  
副会長 長 友会  
会長 友会  
副会長 友会

転している。貿易収支は六月から、経済収支は八月から、総合収支は九月から赤字に転じたという具合である。  
ために、引き締め政策の緩和を要する空気がジワ／＼と高まっている。米国や西独が景気刺激策に乗り出したことも緩和要望を側面から支持する材料となり得よう。しかし、日銀や大蔵省は総需要抑制策の基本を簡単に崩す考えはない。何んと言っても消費者物価の今後の動向と五〇年春闘の結末を見極めな

いかぎり、動きがとれないといったところだ。政府は来年三月末の消費者物価を対前年比一五%の上昇に抑えるという目標を掲げているが、大方の観測では一七一・八%から二〇%近い上昇は避けられず、従って春闘のベースアップ率は二〇%以下に抑えることも容易ではなさそうだ。  
わが国の経済が安定成長ないし低成長段階に入ったことは確実であるし、資源、公害、環境問題等による制約条件を考慮すれば、政

策としても低成長政策でリードしなければならぬことは言うまでもない。しかし、福祉の充実を図り、国際協調政策を推進するといふ要請などを勘案して、果してどの程度の成長率を維持すべきかというところは、むづかしい問題であるが、五%以下の低成長水準でないことだけは断言してよいと思う。有力銀行や調査機関が発表している日本経済の中期展望の調査結果には、大体七・八%の成長率となっている。そして五〇年度の経済成長率は

大体四・五%が妥当とみられている。経済予測は結果からみて政府も民間も大きく狂うことが常習となっているが、それはそれとして、日本の経済成長が国際協調の水準を高め、内容を充実する方向に役立つように配慮され、リードされることこそ、特に今後に期待したい。

前東洋経済新報社社長  
東洋経済新報社相談役  
昭和七年 商学部卒

今回、農協中央会主催のソ連視察に参加し昭和四十九年七月四日羽田をたら、新潟經由ハバロフスク空港到着した。東京より二時間、時差は一時間である。  
ハバロフスクはソ連極東地方の表玄関であり、アムール河口から七十八キロの地点にある。市街はアムール河岸台地ブリュスニキ川とチェルティモフカ川によって分けられる三本の丘上に発達しているが、この丘はそれ／＼現在の中心地であるレニン街、カールマルクス街、セルシシュツ街を形づくっている。ここは一八五八年東部シベリア連隊のデイヤチエンコ大尉を長とする第十三国境大隊の一部隊によってつくられた哨所であったところで見晴らしのよい高台で昔から人間が住みついたとみられ、当地ブリとよばれるナナイ人の集落であって、十七世紀にこの方面に進出したロシア人エロフレイ・ハバロフの名を記念してハバロフスカと命名した。その後急速に発達し、行政的中心地となり市制をひいてハバロフスクと呼ばれるようになった。市内には駅前広場があり、この都市の名前と関係の深いハバロフの銅像がある。又コムソゾリス

ク広場があり革命前の中心で広場中央に極東地方の国内戦で戦死した英雄等の記念碑がある。この広場から中心街がはじまり、鉄道専門学校や大食料品店及びホテル・グリュボストーク(極東)等がある。通りの終点が新しい中心地レニン広場になっていて、この中央に大レニン像や噴水がある。現在人口四十六万、鉄道、河川、航空路などによって各地に結ばれ、電線工場その他大工場があり今なお発展途上にある。夕食後レニン広場を散歩したが九時を過ぎて暗くならない。翌日は午前中市内見学して午後五時ハバロフスクを出発して七時にイルクーツクに到着した。所要時間は二時間で時差が二時間ある。レニン通りとマルクス通りの交差点にレニンの銅像のある広場があり、この附近が市の目抜き通りとなっている。カール・マルクス通りがアングラ川につきあたる附近が川岸公園である。又附近には十九世紀末に建設された由緒ある地方誌博物館及びイルクーツク大学図書館、トルド(労働)とよばれるスタジアム、劇場等がある。旧市内には帝政時代の美しい建物が少なくないが、この附近は地震地帯に入っているため、他の都市に見られるような高層建築は見られない。又史跡としてはゴルバードウイドム(せむしの家)がある。これはイルクーツク最古の木造建築で屋根が四方斜面になっていて丸太づみの二階建である。バイカル湖周辺に出掛けたが日曜で

満員の為乗船出来ず残念でした。この湖はイルクーツクよりバスで一時間の所にあり、周囲を標高二千四百メートル以上の山々に囲まれ、長さ六百三十六キロ(東京・岡山間)、最大幅七十九・四キロ、最小幅二十五キロ、面積は三万一千五百平方キロ(琵琶湖の約五十倍)。これは面積に於いて世界第七位、深さは世界一である。三百三十六の大小の河川の水を集め、排水はベアレガラ一本である。七日は午後二時イルクーツクを出発して六時五十分にはタシケント空港へ着いた。タシケントは中央アジアでモスクワから四時間五十分の所にあり、ウズベク共和国の首都で、人口百五十万、ソ連第四の大都市で政治経済の中心地である。空港に数十機と並ぶ飛行機に驚く。中近東、東南アジアとも定期便が通じ、ソ連内各地とは直航便で結ばれている。広い庭にはバラが咲きみだれ、みことである。ホテル・タシケント附近には大劇場があり、オペラやバレエだけでなく共和国大会なども開かれる。ホテル前の通りには十一の学部を持つタシケント大学、ゴリキー劇場、ピオネール宮殿、百貨店があり、これと交差するレニン通りにはレニン広場と政府官庁がある。旧市街の西端にあるキロフ公園にはブラハの最古の史跡であるサマン朝の廟がある。その中にはサマン朝の数人の王の墓がある。サマンカンドはブラハラから五十分の所に

ある人口四十五万人の大都市であり、二千五

百年の歴史をもち、幾多の民族の興亡をとどめた古都で、遺跡も多くイラン系のゾグド人の首都であった。傭兵建国の都城の城壁は周囲二十余里で極めて堅固であり、住民も多く諸国宝貨も多く集まっている。

モスクワは言うまでもなくソ連邦の首都であり、クレムリン宮殿の所在地である。地理上では北緯五十五度四十分、これは樺太最北端の位置にあたる。人口約七百五十万という政治、経済、商工業、学術、文化、芸術の中心都市として名実共に世界の大都市である。市内を見物するには一週間から十日かかり、

### 『季節の花』

ポインセチア

比留間 義秀



ポインセチアといえは、すぐクリスマスマスを思いおこす人が多いだろう。デパートなどのクリスマスセール飾り付けに、ポインセチアの造花が添えられ、クリスマスと切り離せない添えものになっているけれども、以外と本物のポインセチアを知る人は少なかったものだが、最近、シクラメンと並び、師走の園芸店や花屋の店先に鉢物が出まわりはじめ身近なものになっている。

その内容はパリ、ローマ、ロンドン、ニューヨークにも匹敵するといわれる。(一)赤の広場とクレムリン、(二)トンチャコフ国立美術館(三)国民経済達成博物館、(四)レーニン・スタチアム、(五)トルストイの家、(六)モスクワ大学、(七)グム百貨店、(八)繁華街、ゴリキー通りの散策等、これに準ずるものは、(一)ゴリキー記念中央公園、(二)ピオネール宮殿、(三)モスクワ屋外プール、(四)レーニン博物館革命歴史文学各博物館、(五)ヴォテヴィツキ寺院、(六)メトロ(地下鉄)、(七)オペラ鑑賞かサーカス見物、(八)市内目抜き通りの散策、(九)モスクワときわひとめを引く、これからの居間や、食卓を飾る鉢物としてシクラメンと並ぶ雄である。シクラメンのような貴品にはいささか欠けるが、ほっと燃えるような赤い花(実は花ではなく苞と云われる)は、強烈な印象を与え、居間や食卓がいっそう明るくなる。

シクラメン



寒さが厳しさをます頃、赤や白やピンクの花をハート型の葉の上に咲かせるシクラメンは、ほとんどが温床栽培のもので、白生地は地中海沿岸から欧州中部の比較的寒い所に咲くもので、実際は不耐寒性で寒さに弱いものです。

冬に花を開く数少ない鉢植もので、大事に世話をすれば、春になっても次々と美しく花を咲かせ、長い間楽しめる花ですが、ちよ

川周遊等である。地下鉄はそのスケールと設備の点で世界的である。料金は全線五コペイカー(約二十円)で何回乗り替えてもよい。無人の出口口にコインの投入口があり、貨幣を入れると自動的に改札が開き中に入る。その他の乗り物にはバスとトロリーバスがあり、料金はバス五コペイカー、トロリーバス四コペイカーで、切符箱のところでコインを入れ自分で一枚切符を切りとり、降りるとき箱に入れて下車する。どこまで乗ってもよい。また路面電車もあり、三コペイカーである。広大な赤の広場に佇んでクレムリン城壁を

つとした不注意で、だめにしてしまうものです。特に、屋外に出したままで、しまい忘れりと、たちまち寒さにやられます。これは根が寒さに弱いためですが、よく水が切れておれてしまったものと感違いする人が多くいますが、かえって悪い結果を生んでしまいます。こんな時には、温室に入れるのが一番ですが、手軽に家庭でできる方法は、新聞紙で鉢ごとくるみ、暖房のきいた部屋に移しておく、しだいに生き生きと生きてきて、また美しい花を楽しめます。花も生きものですので、花の特性にあった環境で育てると、長い間楽しめるものです。

### 『通信』

左の通りおたよりを頂きました。

○安食 得郎氏

早稲田校友会国分寺会報第一号お送りいただき有難うございました。創刊号でありました内容がなかなか充実しているのに驚き、梅田先輩外幹事二同様、御多忙の中その御努力に感謝致します。今後共立派な号になりまますよう期待して居ります。

○河原 巖氏

眺めた時こそ、今モスクワに在るのだという実感が沸いた。赤と言うとはロシア語でクラスナヤというが、これは美しいという古代スラブ語であっていわゆる赤い国の赤ではない。クレムリンこそモスクワ見物最大の見どころであり、ソビエト最高首脳陣の居城として世界の耳目を集めている宮殿である。次にレニングランド市は北緯六十度に近く、人口四百七万人、第二位の大都市で、ピョートル大帝とプーレモンとゴリゴリとドストエフスキの町であり、美しきネヴァ川の流れる町で、運河と白夜と典雅な石の都である。

花屋経営  
昭和四三年 演劇科卒

住所を変更しましたのでお知らせします。国分寺市東元町二丁目三三三三〇 電話(一)四二二三(二)四一七一〇 勤務先 中央大理工学部 専任講師 ○佐々木 喜代子殿 しばらく関西に居りまして役員会のことも知りませず大変失礼申上げました、何のお役に立たないささか心苦しい思いしております。在京の折は出席致しますのでどうぞよろしく

### 『お知らせ』

毎月第三金曜日 午後七時より 駅北口のパールレインにて役員会を開いております。役員でない方もご意見お聞かせ頂ければ幸いです。当夜は時局談など、いろいろと話が飛び交いますのでお時間のある方はどうぞお遊びにおいで下さい。

### 後記

十一月十五日役員会で第二号発行決る。直ちに電話にて原稿依頼。月末原稿受領。編集版、印刷というあわたたしきでしたので、ご執筆頂いた方々に稿正をお見せしております。誠に不備なことですがご海容願います。

発行所 国分寺市東元町一三三二四 早稲田大学国分寺校友会・広報部